

北タイ農村における農業経営の変容

佐藤康行

一 はじめに

これまでタイ農村の家族経営について、田坂敏雄氏と宮崎益氏との間で論争が行われてきた。この論争は、家族周期に沿って現れる「屋敷地共住集団」と「近接居住世帯群」の共同・協同経営についての見解の相違によっている（詳細は『アジア経済』を参照されたい）。タイ農村の家族経営の原型を考える上で、家族周期に沿って親子・兄弟姉妹の共同・協同関係をみていくことは重要である。しかし、現在のタイ農村は生産関係の賃労働者化と消費生活の商品経済化の浸透によって、親子や兄弟姉妹関係の共同経営が少なくなり、家族経営の原型を理解するだけでは充分な理解ができない現状が現れている。

二 北タイ農業の素描

タイ全土における田の平均所有規模は一九八一年時点で二六・四ライ（四・二^{ha}）、北タイは二一・三ライ（三・六^{ha}）で全国の中で最も小さく、なかでも調査をしたチエンマイ県・ランプーン県は八・八ライ（一・四^{ha}）と零細である。タイは気候的、歴史的、文化的に東北部、北部、中央部、南部で相違しており、農業生産の規

模や種類などを始めとして生活の隅々において相違している。北タイ農業の特徴は、零細な規模に加えてラムヤイやマムアンなどの果樹栽培や木彫りが盛んなことである。調査は北タイのチエンマイ県サンバトーン郡トンケーオ村と同じく北タイのランプーン県メーター郡タカ村で行った。

三 タカ村の農業と生活

タカ村は灌漑設備が整っていないために、一期作しかおこなえず兼業に依存した生活をしており、兼業依存型と呼べる生活形態が多く見られる。農業よりも兼業収入のほうが多く、男子はこの一〇年間中東やバンコクへの出稼ぎが盛んであった。しかし、近年は中東に出稼ぎに行かずに、自宅で木彫りをしている人が増えている。三年前には木彫りの会社が近くにできたためである。木彫りの収入が農業と比べてよいため、若い男子は経営規模に関係なく木彫りに従事している。そのため、農業は片手間で兼業に専念したりする人が増え、親族の協力が重視されなくなっている。「近接居住世帯群」（兄弟姉妹関係）は散見されるが、それらの間では普通の村人と同様に等価労働交換の関係になっている。

ところで、調査地の農村家族は次の三つに形態分類できる。一つは土地がなく小作や兼業に依存している家族、二つには土地を持つており自作や兼業をしている家族、最後に商売や公務員をしており自らは耕作しない家族の三つに分類できる。この三分類はこれまで階層を形成してきたものであるが、こんにちこの分類がそのまま階層を形成しているわけではない。というのは、タカ村などでは經營

規模に関係なく農外就労の兼業化が進んでおり、兼業収入が家計の

の、親族とは協同作業（労働交換）が行われているにすぎない。

る多就労の家族労働が行われているからである。土地のない人は小作より木彫りのほうが収入がよいため、兼業に力を入れてゐるし、

四 トンケート村の農業と生活

トンケーオ村は灌漑設備が整つており、年間を通じて二期作ができるため、一年を通じて農業を中心とした農業依存型の生活を送っている。農業が生活において占める意味が大きく、農作業において互いに助け合うアオ・ムー関係が多い。トンケーオ村の場合、中層

以上から、村によって条件を異にするものの、現在は若者の都市への流出が加速化しているとともに、家族計画の実施とあいまつて子ども数が減少し、「屋敷地共住集団」それ自体が少なくなっていることがあげられる。そのため、親子による共同は少なくなり、親族による農作業は協同（労働交換）が大半を占めている状態にある。さらに、大企業が農村に参入し、兼業や複合経営が増加し、家族員の多就労化が進んでいる。一言で言えば、従来の土地に依拠した家族農業形態が生産関係の貨労働化と生活面での商品経済の浸透によつて変化していくと言えるだろう。

といえるほど大規模な経営を営んでいる家がなく、全戸が零細ないし土地なし層からなっている。それでも田畠を所有している農家は稻作プラス大豆、ニンニク、キャベツなどの複合經營を行っている。大豆は昨年から大企業が輸出向けに村人に生産を依頼してきたものであるが、これは田畠をある程度所有している階層には複合化の促進と収入増になるが、土地のない人には人夫として日雇いに従事するしかなく、必ずしも収入増にはなっていない。大豆を含めて畑作物は一般に親族間の共同・協同は見られず、全員賃雇いで賄われている。家族計画とあいまって一人っ子が多く見られるが、これは比

最後に、近年の農村開発について取り上げよう。夕カ村ではリーダーを中心に、トンケート村ではNGO（民間援助団体）の指導によってそれぞれ農村開発が行われているが、これらは村人の集団化を図り、村人の生活を助けるためにつくられている。たとえば、貯蓄組合や米銀行などが結成され、借金や借米が低利子でできるようになっている。こうした農村開発の諸側面は、親族の範囲を越えて村人の生活を支えている。親族機能が有していた多様な機能が縮小し、代わって村落や集団がこれまでの親族機能の一部を担い、村落生活の中で占める意味が大きくなっている。

五
おわりに